

平成 21 年 4 月 6 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18530628  
 研究課題名（和文） 施設事例に基づく「戦災孤児」に関する実証的研究  
 研究課題名（英文） Objective Research on Facility for War Orphan, Keiai Gakuen  
 研究代表者  
 前田 一男 (MAEDA kazuo)  
 立教大学・文学部・教授  
 研究者番号：30192743

## 研究成果の概要：

戦後直後に戦災孤児の「保護」にあたっていた恵愛学園（長野県松代）から申請者の研究室に寄託されている、膨大な関係資料を整理分類し目録を作成する基礎作業を継続し、資料細目録を完成させた。そのなかの『業務日誌』も昭和 25 年度から 31 年度にわたって翻刻し、当時の教育実態の解明を行った。また戦争孤児の関連資料の収集にも努め、重要と思われる基幹資料については公開用に翻刻した。これらは、戦後直後の教育実態を知る実証的な資料として価値あるものであり、今後の研究に資する基礎資料となるであろう。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	540,000	3,640,000

## 研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：戦災孤児・浮浪児・学童疎開・児童福祉・戦後教育改革

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 戦後教育史のなかで「欠落」している社会的弱者の集団とされた戦災孤児についての資料が、わずかに新聞などの資料や当時の回想にのみ見出せるだけで、厚生省も文部省も十分に把握するところではなかった。

戦後、そのような子どもの社会的集団が存在したことを、歴史にとどめなければ、戦後教育史が正当に描ききれないのではないかと考えた。

(2) 戦争孤児に関する研究は、資料的な限界もあり、ほとんど究明されていない。資料的には、厚生省による 1947 年調査が唯一の

統計的な資料であるが、約 13 万人と示される数字よりも実際にははるかに多い戦争孤児がいたことが推定される。単行本としては、田宮虎彦編『戦災孤児の記録』（太平出版社 1972 年）、西村滋『雨にも負けて風にも負けて』（双葉社 1975 年）、『焼け跡の子どもたち』（クリエイティブ 21 1997 年）などが刊行されているが、貴重ではあるが体験記・証言集に留まっている。研究的には、自治体史で触れられるか、学会発表で事例研究がなされるかの程度で、研究的にも未開拓な領域である。唯一の先行研究は申請者による「解説」論文（前掲『焼け跡の子どもたち』pp. 218～254）であるが、戦災孤児の全体像をまだ構

造化するに至っていない。今回対象としている恵愛学園所蔵の、第一次資料を前提とする実証的研究の持つ意義は、以上の観点からして、学術的に見ても小さくないと考えられる。

(3) 先行研究による戦後新教育の一般的な歴史叙述は、敗戦後、戦前の超国家主義教育と軍国主義教育とが禁止・排除されつつ、同時に民主主義教育と平和主義教育とが導入・普及されていくものとして特徴づけられる。まだ児童福祉法の制定も戦後の新しい動向として、児童の権利を謳ったものとして評価されている。たしかに教育政策や福祉政策の観点からはそのように叙述されるであろう。

しかしその一方で、戦災孤児という社会的存在が生まれていたことを併置しなければ、そしてその問題性が明確にされなければ、戦後新教育の歴史的な性格も正当な評価が与えられないように思われる。敗戦・講和・復興という単純な歴史的流れには収まりきれない社会的弱者への着目は、敗戦後の日本社会における国家の戦後責任を鋭く問う、もうひとつの視点を持つことになるであろう。

(4) 戦災孤児に関する実証的研究は、戦時下における国民学校研究、学童疎開研究の進展にも寄与するであろう。学童疎開については、体験者の証言が組織的に集められつつあり、また研究も多様な観点から進められている。この観点から、学童疎開の「後史」としての、つまり学童疎開を相対化する視点を持つ戦災孤児研究への期待は大きい。戦後新教育のなかで、あるいはさらに広く日本の子どもの歴史のなかで、戦災孤児研究は、後世まで「記憶」されなければならない事実の発掘と、その確定作業になるであろう。

また、戦災孤児の問題は、敗戦直後の日本の子どもの社会的問題であると同時に、現在国際紛争が引き起こしている子どもの実態にも直結していく。短絡的な結び付けには慎重であるべきだが、同様の問題についての諸外国の研究をレビューしつつ、日本における歴史的な課題と世界における現代的な課題との往復も、必要になってくるであろう。

## 2. 研究の目的

(1) 長野県松代市にある児童擁護施設、恵愛学園が戦後直後戦災孤児を受け入れ、かつ当時の資料も保存していることから、恵愛学園を事例研究と位置づけ、その実態の解明、特に東京都との関係に注目しながら分析することを目的とした。

(2) より具体的に述べれば、敗戦直後、戦争孤児という社会的存在が新たに登場することになった。学童疎開中に都市に空襲があ

り親が焼死した戦災孤児、大陸から引き揚げられる際に親子が離れざるを得なくなった引き揚げ孤児、また広島・長崎への原爆投下により現出した原爆孤児などを総称した戦争孤児である。総力戦体制のなかで超国家主義教育が要求した「少国民」としての生き方に忠実に従ったことが、敗戦後予想だにできなかった天涯孤独な社会的存在にされてしまったこの集団に、社会的な発言力はまったくなかった。そればかりではなく「浮浪児」として警察による「狩り込み」の対象とされてしまった。

## 3. 研究の方法

(1) 上の研究目的から、戦災孤児に焦点を当てつつ、また敗戦後から約 10 年間を中心にして、具体的な事例研究として長野市松代にある恵愛学園を取り上げた。松代は陸軍大本営の疎開先として知られているが、敗戦直後その施設が東京都の戦災孤児施設として活用されていたことはほとんど知られていない。その恵愛学園には、ダンボール 4 箱にのぼる 1940 年代半ばから 80 年代初頭に及ぶ資料群が保管されている。その資料群は、この時期の実証的な研究を進めて行く上での大きな特色となっている。資料の散逸が甚だしい戦災孤児研究にとって、個別事例の積み上げがこの領域に求められている実際的な研究方法といえよう。

(2) 特に実証的な方法を意識した。資料保存の観点から、まずは基礎資料の確定に力点を置き、寄託された資料の細目録を作成することで、散逸・拡散を防ぐための基礎作業を徹底した。

と同時に、恵愛学園を事例として位置づけられる資料収集も意識するようにした。

## 4. 研究成果

(1) 資料の分類・整理と細目録の作成  
申請者の研究室に寄託されている恵愛学園関係資料を整理、分類し、細目録を作成する基礎作業を、3 年間を通じて実施し、目録カードへの登録が終了した。項目を、箱 No.・No.・SubNo.・SubSubNo.・表題・作成・宛先・年号・年月日確定区別(至)・種別・数量・形態・備考として区分し、詳細な細目録とした。その項目の総数は、4060 点以上に達している。

ただし、すべて戦災孤児関係というわけではなく、むしろ設立当初の資料が少なく、豊富に戦災孤児関係が満載されているわけではない。その点で「備考」欄を活用し、目録には戦災孤児関係の資料をわかりやすく示す工夫を凝らした。

## (2) 資料の翻刻 1

戦災孤児に直接関係する資料について、基幹部分と思われる戦後直後の恵愛学園の業務日誌については、昭和25年から昭和31年までをデータファイルに翻刻した。

たとえば昭和25年(1950年)4月の冒頭の業務日誌は、以下の通りである。2日間のみ例示してみよう。

[昭和二十五年四月業務日誌 恵愛学園]

五月十七日(水)

増田行事 名誉園長丸山師自坊に席を借り当村々長、厚生主任外村会議員一同に対し当園創立以来の謝恩のため招待会を催す 経営者側より会長小平師都合上欠席し水上常任理事出席したり 郡より厚生課長須見主事臨席、主催者側より園長、名誉園長、増田、宮本両職員出席し接待に当る、村議中四名欠席したるも終始和気席に満ちて盛会であった。大田保母休暇帰宅一泊の予定宿直、宮本職員

五月十八日(木)

増田学童全員登校、病人なし柳沢保母、県主催の脱脂ミルク加工、利用等に関する実習に出席大田保母午前十時帰園幼児、勇体熱あり休養、秀子、受持先生家庭訪問のため二三日家庭に帰す保健所より山本衛養師来園、献立表作成

## (3) 資料の翻刻 2

著名な教育学者、城戸幡太郎や三木安正らを中心とする戦災孤児に関する要保護児童研究会(1945.9)などについての研究資料や新聞記事などの翻刻も行った。戦争の結果、戦災者又は引揚同胞の中孤児となった者の数が相当多い混乱なかで、そのような社会的弱者を対象に真正面から研究対象としたこの研究会については、従来触れられることがなかったことから注目に値する。

たとえば、「戦災孤児等要保護児童調査中間報告(昭21・9・15)を部分的に紹介する。なか、要保護児童研究会は東京都民生局保護課の委託研究として、要保護児童研究会に属する文部省教育研修所員及び東京帝国大学心理学科学生によってなされているものである。

調査の結果から、「施設の概況戦災孤児乃至浮浪児の収容施設を典型的に見ると大要四つのタイプに分けられる。」として、具体的に紹介している。「(1) 在来の孤児、浮浪児等の収容施設(養育院等)であり(2)は在来の教護施設(家庭学校小塩塾等)であり

(3)は新興のもの或は在来の保育施設の転換したもの(あづさ園、婦人同志会、愛児の家、興望館等)であり(4)は戦災孤児学寮(文部省所管の戦災孤児等集団合宿教育所)である。最後の(4)は戦時中の集団疎開閉鎖後引取手のないものを集めている施設で

謂はゞ純粹の戦災孤児の教育施設であるが(1)-(3)はそれぞれ設立の目的及び沿革に従って特色はあるものゝ、現下の児童保護緊急対策の必要上収容児童は極めて雑多であって処遇上不都合を果していることが多い。之等は速かに系統的に再編成してそれぞれの機能を十分に發揮せしむるべきであろう。」というものである。恵愛学園は、この分類からすれば、(3)に位置づけられるものである。さらに対策として「終局の目標は、一本立ちになって世の中に送り出すことであるから、生産教育或は職業教育ということが直ちに考えられねばならない。従来の社会事業の弱点はそれが生産性に欠けていたことで慈善事業という観念が濃厚であったことによる。かゝる社会事業の寄生的性格を払拭しないかぎり、問題の解決はあり得ないであろう。我々が生活と生産と教育とを一体化した施設の必要を称える所以は此処にある。」としているのは、研究に基づいた当時の卓見といえるが、それが教育政策として実現することはなかった。

## (4) 沿革史『草創をふりかえる 恵愛学園』(2002年11月)の位置づけ

本書は非売品で、発行所は社会福祉法人八葉会・恵愛学園、B5版七二頁のハードカバー本である。恵愛学園にかかわる唯一の先行業績であり、この沿革史から、設置主体の特徴、恵愛学園の持っていた特殊な条件、長野県と東京都とのかかわり、生活の実態と子どもたちの心理的状況など、戦災孤児と恵愛学園をめぐる実証していかなければならない課題を発見することができる。

以下、部分的な抄録にとどめざるを得ないが、主に設立についての箇所を採録した。

◇「慈雨は零となって一刊行に寄せて」社会福祉法人八葉会理事長 海野良澄

「敗戦直後の凄惨たる戦災孤児中であって、これの救済にいのちを懸けられた先徳各位、これこそ慈悲道なり、と応じられたM・Kの代々の御住職方の御熱意を思う時、襟を正さずにはおられません。加えて、本学園設置の意義を深く理解され、常に変らぬ御協力を賜り続けておられるS地区の皆様、及び『七人のおじさんおばさん』と慕われた東京都荒川区役所の有志の皆様(初代の方々とその遺志を継がれている二代目の方々)を措いて本学園の歴史を語ることはできません。(中略)

戦災孤児や引揚孤児の方々が発足時より十年足らずで幸いにもここを巣立ち、それぞれの道へ羽搏いて行かれました。当初は、間もなく不幸な子供たちは皆無となるだろうという予想でした。が、これは完全に覆され、家庭で育つことができず、やむを得ず入園してくる子供さんが後を絶たなかったのです。(後略)」

◇「座談会・みんな温かい気持ちだったんですよ」

「山極[麟会一引用者注]さんは学園を始めるにあたって、満照寺で会合を盛ったんだ。その時、山極さんは埴科仏教会長だった。学園を作ろうとしたのは仏教会長の山極さんの発想だな。素晴らしい先覚者だった。山極さんは大体そういう人ですよ。温泉を掘ってみたり。事業家というか、弘法大師みたいな人だね。これからは幼年教育が大切だとひらめいたんでしょう。」(水上泰宗氏・満照寺東堂)

「最初は東京都の施設だったんだよ。それから昭和二五、六年に長野県の子供も入れるようになった。最初は東京の直営の施設にするということで、東京都からここら一帯を調査に来たらしい。三〇〇人ほどの施設にすると。でもここは不適當となり、東京・石神井の方へ作ることになった。それが縁となり、仏教会で作ったものかもな。」(宮本了吾氏・禅透院東堂 恵愛学園第四代園長)

#### (5) 資料調査 1

戦後直後の状況把握のため、プランゲ文庫「雑誌」コレクションを対象に、キーワードとして「孤児」「浮浪児」「疎開」で検索しながら、丁寧な資料調査を実施した。先行研究においても活用されていない雑誌記事が発見されることも多く、当時のジャーナリズムがどのように「戦災孤児」を捉えようとしていたのか、その実態の報道も含めて、興味深い資料が集まりつつある。

#### (6) 資料調査 2

沖縄への調査も実施した。日本で唯一の地上戦を経験しなければならなかった沖縄であり、当然戦災孤児が生まれたはずである。その注目度は問題意識が高いものの、まとまった研究は皆無であった。

資料収集の段階だが、戦争孤児関係資料については、以下の文献や資料が参考になる

- ① 『沖縄大観』月刊沖縄社 1986
- ② 『なは・女のあしあと(戦後編)』那覇市総務部女性室編 琉球新報社事業局出版部 2001
- ③ 『戦後沖縄児童福祉史』沖縄県生活福祉部[編]・刊 19984)
- ④ 『厚生白書 1960 年度版(創刊)』琉球政府社会局庶務課編 琉球政府社会局 1961
- ⑤ 『社会福祉事業十年の歩み』琉球政府厚生局民生課 琉球政府厚生局 1964 ほか社会福祉関係資料コーナー
- ⑥ 『戦災孤児チャーリー』について・『チャーリー: 1フィートからよみがえった男』玉城朋彦著 沖縄出版 1985 ・『沖縄でテレビを創る』玉城朋彦著 メディア・エクスプレス 2004 ・「沖縄戦1フィート運動と戦災

孤児チャーリー」

- ⑦ 『琉球史料 第3巻』
- ⑧ 『沖縄群島社会事業要覧(第1巻)』4号まであり(ただし沖縄県立図書館には所蔵されておらず、公文書館に、第4巻が所蔵とのこと)
- ⑨ 『情報』(琉球政府行政首席官房情報課)第1・5・12・20・23号が県立図書館に所蔵、肝心の14号・22号は見当たらず。14・22号の情報は、『沖縄の社会福祉25年』(1971年)による。

なお、広島原爆孤児については、新田光子編『戦争と家族』(2009年3月)に高橋三郎が「研究ノート『原爆孤児』問題」という優れた論文を発表している。

(7) 『科学研究費研究成果報告書』を作成する。その内容は、すでに述べてきたとおり、恵愛学園関係資料の目録約4060点、およびそのうちの基幹資料と思われるいくつかの文書、昭和25年から昭和31年までの『業務日誌』の抄録、関係新聞記事、民間の研究会の活動記録などである。

これらの報告書を貫く問題意識は、戦後責任への問いかけであろう。敗戦後の戦災孤児の問題を見過してはならない理由は、国家と子どもとの関係を問う本質的な課題を内在させているからである。大人が起こした戦争によって、国家のために滅私奉公を強いられた「少国民」が戦争孤児という社会的存在になっていくプロセスを跡付けていく時、そのような子どもが陥らざるを得なかった社会的弱者の状況に対して、国家がその保護、教育、養育責任を果たしてこなかった事実は、重大である。植民地への加害責任と同じく、物言えぬ戦災孤児の存在は、子どもという視点から敗戦後の日本社会における国家の戦後責任を問う問題として成立すると思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- ① 前田一男、鈴木源輔における研究観の転生、立教大学教育学科研究年報、51巻、53-78 2008年、(査読無)
- ② 前田一男、大学生のうけとめた戦災障害者、傷痕、33巻、14-41、2006年、(査読無)

[その他]

- ・「孤児たちの戦後 『恵愛学園』入所者の63年 本当の姿を伝えるために」『信濃毎日新聞』(2008年8月16日)

- ・『『学校史』の編纂からみる建学の精神』（『三田評論』1117号「特集 学塾の歩みを記録する」）慶応義塾（2008年11月1日）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

前田 一男 (MAEDA kazuo)  
立教大学・文学部・教授  
研究者番号：30192743

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者